2007年2月10日(土)
PM15:30～

オープニングトーク
体験活動が「こころ」の成長にもたらすもの

ゲスト：藤村靖之氏（環境発明家）・佐々木豊志氏（くりこま高原自然学校校長）　聞き手：横山隆一氏(NACS-J)

○藤村氏
非電化の発明に力を注いでいる。電気を使わなくても愉しい生活がおくれることを伝えたいと思ってやっている。非電化冷蔵庫・非電化夜だけスローエアコン…など製作。無理して我慢しての生活は愉しくない。愉しい方を選べばいいと思っている。

非電化除湿器：中小企業に製造をお願いして、製作コストだけでほしい人に分けている。エコロジー派の人には好評だったが、そうではない人には「遅い！」と言われてしまった。

非電化冷蔵庫：モンゴルの遊牧民たちは、羊の肉が 3 日しか保たないことで困っていた。電気は使えない…非電化冷蔵庫を作ることに。羊２頭分の値段で売って、羊１頭分の値段で作れれば羊１頭分の儲けになる。現地の企業家に呼びかけて、現在はモンゴルでビジネスになった。

未来の学校プロジェクト：　「世界で一番すてきなバイオトイレ作り」…うまくいかなくなって頼まれた。要因は、関わっている大人に環境のことが好きな人がいない、子どものことを考えている人がいない、失敗したくない…子どもたちも影響を受けたのか失敗したくない…

引き受けるに当たり、子どもたちに感動を持たせることを主題に切り替えることを条件とした。大人は猛反発だったが「失敗したら藤村のせいにすればいい」と言ったら了解。

失敗したらやり直せばいい、その方が感動は大きくなる。チャレンジすることが大切。プロジェクトは里山保全が舞台だった。里山の土を使って自分たちだけで大きな水瓶を作れたら世界一じゃないか。パン焼き窯作りだけではフツウ。里山にある酵母探しから始めておいしいパンが作れたら世界一じゃないか。そしてバイオトイレ。うんちをするということが子どもたちの中で恥ずかしいこととして捉えられている。バイオトイレは排泄物を自然の循環の中で弱った木の肥料にする仕組み。うんちの価値が変わる。子どもたちの価値観の転換。できた雑木林の中のバイオトイレはうずまき型で里山の竹を壁に使った。窓はガラスがない。プロジェクトの最終日、スピーチで「世界中のバイオトイレで 2 万回くらいうんちをしたけれど、このバイオトイレが世界中で一番すてきなバイオトイレに間違いない。」子どもたちは皆泣いていた。当時の子どもたちと今も文通している。

○佐々木氏
藤村さんのお話にもあったように感動から何かが生まれる。大学時代から野外教育（冒険教育）に携わり、現在は非日常の冒険だけではなく日常的なことにも広がっている。
冒険活動は子どもたちと北上川 200 キロをボートで下るなど…

非日常の活動から何かを伝える…が原点だが、現在は日常の暮らしをつくる…ということにも広がっている。くりこまというフィールドは国定公園でもある素晴らしいところ。
暮らしから学ぶ、自然体験から学ぶがテーマ。不登校の子どもたちを１年預かり、暮らしを作っていく。これはケの世界。冒険活動（非日常）はハレの世界。施設も増え、自然学校は任意団体として残し、様々な事業は NPO 法人として行うことにした。くりこま高原エコビレッジ。

生活から学ぶ…できる範囲での自給がベース。あるもので何とかする。畑、家畜、採集、廃材（薪ストーブや建物に）、自分たちで作る。また、不登校の多くは幼児期によい体験をしていないことから、森の幼稚園も始めた。子どもだけではなく、ネイチャーガイド、音楽会などのイベント、クラフト講座、山村留学、生き方を考える時間（疲れてしまった大人向け）、若者自立塾（自然体験でやっている人は少ない）など家族向け・一般向けにも事業をやっている。

川下りのとき、着いた海にはゴミが浮いていたり、または天気が悪かったり…普通ならせっかく海に来ても泳がないだろうな…という状況のことがあった。けれど子どもたちは予測に反して喜んで泳ぐ。海に来るまでの過程が子どもたちの気持ちをそうさせる。バスで簡単に来たなら泳がないだろう。

不登校やニートの子どもたちはすごく批判的な気持ちをもっている。そういう気持ちを持つに至った過程（心のありよう）があったはず。けれど、大切なことは、自分がどうしたいのか、何をしたいのか。そしてそこに関わる人たちの想いも重要。自分の意志でやりぬくことが冒険。大切なこと。

横山氏からお二人へ質問いろいろ…

横山）モンゴルに行ったりしてかっこいい。スピルバーグに似てる？宮崎駿かな？どうやって発明のためのニーズが藤村さんに届くの？
藤村）すでにあるものを組み合わせるのが発明で発見ではない。発明に大切なのはテーマ。自分のテーマは困ってる人を助けることだから、困ってる人がいそうなところを旅行している。悪い人は困っていない。大抵いい人が困っている。「何か困ってる？」と聞いて歩く。お互いが心を開いて会話できるようにしている。
横）困っている人に発明するという個人的なことを地域のビジネスに引き上げているのがおもしろい。それも困っている人対象？
藤）自立型、地方型の起業を応援したい。そういう人たちはやりたくてもネタに困っている。発明をプレゼントしてあげている。正しい選択肢が見つかっていない、私の使命かもしれない。
横）どう広報活動をしていくの？
藤）非電化冷蔵庫の場合では「本当に羊 2 頭分なら買えるのか？」と聞いて歩いた。みんなが買えるとなれば今度は企業家を集め、「1 頭分で作れれば一頭分もうかる。」と持ちかける。ビジネスにするパートナーはいい人であることが大切。面接していい人で能力のある人を選ぶ。10 分話せばわかる。数年がかりの気の長い仕事。20 カ国くらいでやってきた。全部途上国。先進国は困っていない。

南米のある国では水が悪くて子どもたちが毎年数十万人死んでいた。なんとかならないか？と思い、すぐに発明が浮かんだ。すぐに日本に帰り実験検証して南米で伝えた。水中の有害な微生物を殺す方法…2 リットルのペットボトルに 300cc の水を入れて炎天下に放置する。日本では無理だが南米では 75℃くらいになる。次に 150 回振って 1700cc の空気と混ぜる。

病原性の微生物は99%が死んで安全な水になる。

横）藤村さんて佐々木さんから見てどうですか？
佐）私、藤村さんの言うところの困ってる人です。共通点が多い。39 才で脱サラ。お金作りはうまくなかったけど、困ってる人を助けたい気持ちは同じ。どう支援したらいいのかアイデアの部分が発明かな。
横）どうして自然学校をやることに？
佐）最初は教員になろうと思っていた。中学時代、母校は荒れていた。当時、先生たちは体験活動を始めた。山登り、田んぼ作り、不良たちがいろんなことをやった。教員になる過程で野外教育と出会ったが、子どもたちにイヤな想いをさせてしまったことがある。低気圧が来て、キャンプをはることになった。言うことを聞かない子がいてテントをはれないまま眠ってしまった。夜中、当然雨が降り、起きて子どものところに行かなければいけなかったのに、行けなかった。ずっとがんばってきた 1 週間のキャンプでさえ子どもたちとつき合えなかった…教員にはなれないと思った。他の道を模索し、一時はあきらめたが、いろいろあって、やっぱりやらなきゃ…と戻ってきた。
横）くりこまをやろうと背中を押してくれたものは？
佐）もともと仕事をしていても、ずっと東京に住むつもりはなかった。くりこまは女房のふるさと。義父に押された。
横）2週間のサマーキャンプ、アメリカでは普通だが広めていくのが大変では？
佐）出す親の方が大変かと思う。理解者はいるけれど…
横）広めるために必要なことは？
佐）文科省の事業が始まりだった。2週間は自分にとっては楽。時間をかけて取り組める。短期は忙しい。

藤）未来の学校プロジェクトは３ヶ月。「里山は大事だから何をしなきゃいけない」では嫌いになっちゃう。里山での体験で感動して、好きになれば自然と守りた気持ちになると思う。感動の三要素は 30 年かかって見つけた。１.非日常的な驚き　２.自主性（やりたい）主体性（自分がリーダー）創造性（リーダーになるとアイデアが出る）これは発展段階でもあると思う。ファシリテーターの存在が大切。３.達成感
この３つがセットになれば、子どもでも老人でも必ず感動する。感動すれば自信が生まれ自分を大切にできる。ファシリテーターは相手の気持ちになれる感性が大切。頭がよくないとだめ。
横）ファシリテーターになりたい人はいっぱいいますよ。くりこま高原学校では佐々木さんがファシリテーター？人材養成はどうしてます？
佐）人材養成講習もあるが、仕事をしながらトレーニングしている部分が多い。分野ごとの講習会も行っているがスタッフのトレーニングという意味もあってやっている。
横）今の時代って講習会は多いと思う。技術は教えやすいし覚えやすい。マインドはどう作るのか？
佐）くりこまは厳しい自然環境の中で生活してきた人がたくさん住んでいるところ。自分も最初、地元の人に「そんなにいいなら冬越してみろ」と言われた。スタッフも４年間は冬を越せなかった。結局本気のやつだけ残っていく。おじいさんからいろんな話を聞いたとき、「大変だったでしょ？」と訊いたら「大変じゃないよ」と答えた人がいた。大変な想いをしたはずなのに「自分の生活を作るという希望感でわくわくしていた」と言われた。「バカの壁(養老孟司：著)」に出てきたY=AX､Aは感情の係数､Yがアウトプット(行動)の部分。どうアウトプットするのか。ニートは A の係数が低い。この係数をふくらませることが大切。
横）Aの係数が低くなってきたと思ってくりこまへ行ったんですよね？
佐）そうですね。

横）都会の生活が A をゼロに近づけていってる悲しい現実。モンゴルとかで超困っている人たちから学ばれることは日本人としてないのか？
藤）超困っているが幸せ度から見たら、アフリカやそういう国の人たちがずっと上。食べ物はおいしいし、みんなやさしいし、すぐなかよくなっちゃう。先進国の価値観の不幸を押しつけられている。ある部分をとりだせば困っていて不幸かもしれないが、そんなことはない。日本はけして幸せではない。アフガニスタンに子どもたちを連れて医師団の手伝いをさせたことがあった。１週間で人間が変わった。何にでも感謝し、自分の役割を探すようになった。アフガニスタンでは目の前で銃弾が飛び交い、人が死んでいく…あれやれこれやれと言わなくても全員が歯をくいしばってがんばった。食べ物あるのが当たり前、親がいるのが当たり前、戦争ないのが当たり前、だった生活の基準軸が変わった。アフガニスタンで命を賭けるほど…でなくても、何かちがうやり方で基準軸を変えてあげたい。佐々木さんのやってることも同じだと思う。もうちょっと過激でもいいかも。

横）ここまでの話で、環境教育や自然体験が必要といわれている背景がみなさんにもわかったんじゃないかな…

（レポート：Green-net　ふじさか　えり）